閑卷驚奇俠客傳

五編

四

へ13
3156
20

へ13
3156
20

六美麗仙冊子庚吉茂沢[illegible]

分庄
平物

此回は前回の終に安次郎が話中の詞なり売きする文盲官さる意し読べし

閑卷驚奇俠客傳第五集卷之四

浪華　蒜園主人編次

第四十七回

遠江の洋中ふ奸黨良善を溺せ
難波の港口ふ老僧未来を示せ

時候は四月の初旬。霞靄く海の面遥ふ舩を漕出せふ。當下順風徐々ふ吹くまゝ。楫子帆を揚走らすふ。波を凌ぐ音潔くして。舩の去くふ箭の像くるまと倒疊席ふ坐するゞ如く。島々浦々の送り往く形容。繪ふ畫まるゝ景色なるふ。乗人共を催して。險不憂苦も忘るまでふ或は睡り。或は又各その話譚どもして。伊良古ゞ崎を後ふす。新居の澳も快過て。遠江國御前の澳を未だ遠く[illegible]陽西ふ光竭て。黄昏迫く做ふなる。英虞氏は海上を望み遣て。暮果ぬ間もなく准備〳〵る酒肴を拿出て。稲城母子ふ勧るゞ。在下們を初めて伴當楫子

の者まで小各酒を呑ゝやうまべ。食歓喜て順風を祝ゝ。下戸ハ序次小々飯を吃べるどする間小。英虞氏ハ一聲叫びて後さまふ仰反つ。涎沫を吐くゆ駭ゝく。現心もなく死容なるまべ。大家諤然と駭き噪ぎ。介抱せんとて起んとすゆ。齊一足痿腰麻痺て。毫も挣くゆ能ハぬ。這抑甚麼とのふ處小一人倒れ。二人倒れて。一箇も涎沫を吐ハゆゝ。开中小在下へ平素より酒を嗜ひべ。多く吃ざりゝゆ故小。要時ハ那這と助起を小垣衣の信夫も緝取庶吉も。亦是幼年なる故小。酷くも吃ぬ故ゆゝべゝ。共侶小立噪ぎて。看病せんと做々まども。竟小同じく痿痺まて。船中小臥てゆゝ。任放心地ハ甚くも遠りべ。只手脚の運動と。物言滓の悃台而已なるまべ。尚も覘ひ居ゝゝ小。柁柄把ゆる船長一人嚮より酒を吃ざりゝ小。人々の倒れ果ゆを看て。暗跡と思ゝく衝立上りて。脚を揚つ舟答を蹈々と履鳴せべ。底より簀板を攫反ゝて。現れ出る瘠者四五個。先這那の衆人の倒れゝゆ光景を看て。齊一呵々とゆ笑ひ。俺老主公の謀畧ハ如く。這奴們を一名も残らべ。蒙汗藥を呑ゝまべ。死人小等ゝき的と做ぬ。ゞ一端より結果けて。快海中へ投棄ゆ。といへど食一器へて道ゆ。如此せゝゆ人ハ殺ゆ。宿鳥を刺より容易々まども。然為とハ船の血小塗まて。港口へ着く候面倒ゆ。刀劍衣類什麼小まま。金銭小成べき東西を奪て。這儘水葬も好ゆべ。縱令河童と欺く程の水練ありとも。這様小そハ活復るべきやうハなゝ。商量しつ。先英虞氏の両刀を奪畧て。衣服までハ剥もせべ。痿ゆ骸を二名ゝて。抬起ゝて。椎の上より千尋の海を望まて。水入と投入ゆまべ。憐れべ。鎗刀弓馬の技小ハ讓られ壮士も。蒙汗藥を吃ゆ故小。怎の術もなく押投られて。當下西小落去く汝と共小流まて弥陀の在と。御國小去まてゆゝ原来木造親政ゞ。开子の仇讐を報いんとて。這船長小分付て。稲城母女と英虞

氏を失ふと巧みふこと。悪さも憎し。這奴ども百會微塵ふ斫破て恩師の妻子を救ふと心意ハ弥猛ふ急遑まども。眼を睜るの物ども言まで。況く手足ハ挣うべ甚麽とも為術ふ。看る〳〵十餘名の件當と海ふ投没らまとる心地怎ぞうとや思ひ宜く査〳〵べうし。その中ふ庶吉ふ枕も手足の動けばふや。這光景ふ堪へ難て。五兵く脚を踏直し。健氣ふも小腋刀を辛うじて拔持つ。前ふ立る一箇の賊ども。肩の邊と鋒外まふ。斬着まば那奴ハ大ふ怒と起し。這小豎子奴怎とする。と刃と下と打落せ。禽一共ふ立蒐と。這奴ハ酒と吃ぎ〳〵狡猾ふ叱と喧響つ。手把り足捕と拽張て。亦復海ふ投んとせ〳〵中ふ一個ど禁めて。ヤヨ要時爭て。這冶郎ハ年紀ふ胆の太やうふ。生色皎く愛敬あり。俺老主公の日屬ふ。男色と好きめく。ふべき龍陽と求めるべど。未ふん心ふ悔ひ〳〵者ども。這小豎子と拿へ去て。倘御意ふ悔ひるべ。俺ども功と賞せらまて。褒美ハ望次第ふ。ふん。縱令ふん意ふ悔ふとも。畢竟一個の小豎子ふ。れが登時殺ふとも活ふとも。料理ふうハ許妥ふべし。這詛ハ如何と。悄語ハ大家齊一詰ふ中ふ。浅痍負る一個の賊ども。杭殺ふと怒ふと。食一勸解て納得ふ。帆綱と把て庶吉と。犇々と捆めて。舷底へ撞と押入ふ。偖開次ハ老樹の刀自。又垣衣ふ。べし。這術妻ふと今番の。令郎君の敵手ふまば。這奴も拿へて。大主公ふ。ふらば。奈何あらん。といふと一個ど詰ふ。不日その女ハ拿へ去とも。令郎君ふ。従ふべくもふ。仇敵と撃んまどくハ。強情的と。所ふまば過失ふ。倘事あらば。咱ど脱落ふるらんも。料ふ難し。然まば可惜美婦人ふまで。只打稠て海龍王の。后ふすること可まと。ふハ然ふと回答つ。同〳〵く。水人と投没ふ。音と。聞ふ。開ふ。腸と断心地ぞ。這比までも在下ハ。最初倒まふ。時。畳有ふ。帆の下ハ。不意も轉落々まば。快く賊ども。看処ふらまで。夢の如ふ。這光景と。看つ。記憶ひ。

おいそ
ちよ吉
吉の女
安つぐ

大書
遠江海中親政
復怨恨

然間に声前の方より高尾舸一艘漕出し。這船を投て寄来るに。一瞬く間に漕迹づきて三反許に成る頃書より明く押照る。夕月の光に附て。但見舳前に立る人在り。その打扮い亮然に所見弦ど。油鎖の甲手臑当に腹巻をまとうなりべし。皂き夾衣を被りて。胸に金具晃め光出て。月に光映を競ひて。身材六尺有餘に見えて。色赤く肉肥きに。月額長く生伸たるが黒漆の太刀鷗尾に佩做し。掌に一條の棒を把る。赤檀木にあらんずらん。筋鐵鑿く打るが。丈八尺許あるを。最も軽げに掉廻して。其船等と。聲を掛け。寄よ寄よと指揮ける。光景。名告で著き海賊の大将軍とは所見るなり。艫の方に部下と見えて。一個の漢子が。半弓に片手箭挾て。眼を配るべ。楫取両個は汗を流して。喘々艪を推めども。艫て艫方へ寄んとしるる。威風烈しき形勢を看て。奸賊們は着急忙噪ぎ。手ホ々々艪檝を取るもあるべ。猛可に帆を捲道を

んと力を勃せて曳揚るに。在下が不造化に。一遍毒手を脱るとしも。再這眴に張上る。帆に撥ぎて敢無くも。遥に那方へ拽飛さるて。真倒に海底に入ぬと思ひしに。後は。快くも死入るにぞあらん。毫も覚えず。做に。巳に人の喚聲。忽然耳に入るべ。不圖眼を開きて是を看るに。年老く瘦臞ひたる。一箇の沙門が耳に附て。こを喃々と呼ぶ有る。原来甦えりと思ひて。心を静めて四下を看るに。衆合船とおぼしくして。貴賤老若几名。取囲て在けるに。垣衣も再甦生して。沾る衣の伜を。開旁に卧て。那沙門は在下が甦えるを見て。大に怡悦び。如何心下は慥に做に。且這薬を吃べとて。甚麽にか。あらん丸剤を一粒投出て。給々べ。在下是を受戴きて。即て服しに。ほのかに氣馥郁と脾下に通て。汐を吐て駭しく。心地忽ち清亮に成ぬ。在下は起上て。先那沙門に謝首して。再生の鴻恩を謝して。衆人をも慰労ひて。有て次第を

尋ぬるに。那沙門のそれなるべし。是は伊豆の下田より。難波津に去く乗合船なり。貧道は所要ありて。土佐國へ去んとして。這船に便船して。昨夜遠江洋を過ぎし。順風もあらざりしに。汝ら等とて澳中に碇を下して在るに。但見べく人の死骸とおぼしく。流れ寓る東西あるを。蓬庫より照らす火に透して看るに。最弱き男女那這二箇なるぞ。溺て間もなしと所看て。汝腦乾てもあらざるに。貪道酷く可憐に思えて。先船頭に情由を告。船中の衆人にも。人命の得難き譬を。語急く說示し。いざ助る的なるべ。這若男女を助けて験んといふに齊一同心せられて。力を勠せて女の死骸を先曳揚て看てあるに。抗中脆に温氣あり。原来男も仔細あらじと。亦復和主を拽揚るに。同く温氣あり。乗人寄て汝を吐しめ。苞蕩を火に焼て。身を煖めるに。すでに何ぞも幽に呼吸出でぬ。さて蘇生に疑なくして。抗撓なく勤る程に。漸々氣息も確乎に做ぬ。さいとて彼此耳邊に附て呼生

うるに。果しなく偖甦生らるるに。是に天幸とのべきに。宿世愛ある死人なるべし。抑和主は何處の人にて。什麼なる故に女と共に海に溺れ。乗合の衆客は只是情死なるんとのべ。奈何ぞや。と問るに。在下は慚愧に堪ざる。然氣なく紛れて。否這女中は在下と縁ある人にあらず。唯同舩の伴侶。今日なる鳥羽湊より鎌倉に去んと發舩せしに。料らざる海賊の奸媒に。蒙汗藥を吃せられて。身體自由を得ざるを。開儘海に投入られたる。以後の事は毫も記えず。抗十餘名の乗合あり。且這女中の母もあり。伴當もあり。擔物もあり。其他の人は無事に欲と同べ老僧慰めて。それ亦意外の災厄なりき。四月初旬の月は。已に入て後なるべ海上は最闇くて。さる人々は看る苗ど。子二ツばかりに追風に做て。汝ら人宜ひとりなるべ。碇を手操真帆を揚て。久九十里来に。今は海とも賢び難しと。案に和主は二名の人は。神佛の冥助ありて。運命強き人なるべ。そなる狂難の中を脫れて。

這船ハ流ル寓ル。甚麽浮も僉前世ようの定業なると如何ハせん。
きりとて。酷く莫歎ゐるとて。那溺没せる人々も。運あるハ又偖置様ハ命
活るも有ぬべしと慰めらるとても。垣衣ハ母のう又庭士ゞうへ什麽成果
ゑんと惟難く右ハ左ハ去る又来もあるる浪の回らぬ人と儀ゐへう狡と思ふ折て
只管ハ泣沉ゐてあるるを。在下酷く勵して。恁ととる今更ハ這首を歎くい
要るきゆゑ泊べき所ハ去泊うべ。在下も共侶ハ。你の所縁を訪ねべし心強く思
ひゐ。恁とても神佛の冥鑒竟ハ錯誤ぜん。悪人の手ハ失ゐるるゆうれある
べくゐと。いう間ハ。来合の甲乙ゞ異きき衣を那這脱て。假ハ在下们二名ハ着甚
濡ゐる衣服を絞ゆう。火ハ干ゐどする程ハ。夜ハ黎明と明去て。紀伊國熊野
の澳ハ来ハゐう。登時船頭在下ハいふゆう。鳥羽より出船しゐるべ又那
港へ回らまくゐ。想ひゐうべるるとも。去向を急ぐ快船ゐるべ。你们二位の所ゆと

ゆて。那里へハ漕回し難し。又這磯頭ハ寄んゆも。巖石峨々し荒磯ゐれば。
開も亦恊ひがたし。さるべ難波へ着んまでハ辛抱してその上ハ左も右もしゐへと。
いふハ是亦推辞べくもあるゆべ心得ゐうと回答をゆう。盤費ハ腰ハ纏さる俵ハ
十四五両齎ゆうゐ。五両許を把出て。先船頭ハ與へゆ。幇助らるとする謝禮を
演るべ。垣衣も亦小六ゞ分ち。盤纏を失ハぜゐうるべ。是も亦五両を支ちゆ。同じ
く船頭ハ與へゆ。何ゐるの雑費ハ充るハ。辞ゐるぐらも。歓喜受て歎待初ハ弥増
つ。垣衣を親切ハ勦ゆ。粥を煮て進めるどゆ。偖而又老僧ハも。五両ゞ十両を呈
して。助命の恩謝を述るハ。那僧些もこれを受ぜ。そハ又益る礼謝物。旅ハ
盤纏の影ゐうぜるべ心細きものゐるを。留めて費ハ充らるとゆ人を救ゐハ出家
の道ゐう。報を受ん與ゐハ非ぜと腹立しげハ窘めて。一切眷顧もせぎりし
うべ。在下又のひるゐへ。仰ゐるゆふひへども。俺身ハ差當ゆて。做べき忠孝

の勤あり。慈しみを奥腹に蓄へられて。只一事の做せるを多くば。不忠不孝の奴と
なりて。黄泉に怨恨を遺すべきぞ。幸ひて聖僧の慈悲に。命助られ給らせ
る。恩は今這三熊野の湊よりも尚深うるに。只些少の報も得せざる。這儘徒し
く別るるべ。怎の日ぞ。在下が心の安堵る晌あらん。屆て許容あれ。と數乙て止ぎ
りなべ。那僧僅かに黙頭きさまでに云へる。滓るべ。這船中の衆客も同く
劬労せられて。酒に酔れ。飯に飽れ。調ぶて饗ぜらるも宜らん。愚僧は雲水に
伴ひて。且暮の露霜に起臥し。艱難を積て功徳とする。行脚修行の者なるべ。
財あるとは却に。佛意に背く處あり。されば決して受ぐまじ。といふを在下推回し
て。衆客に東西奈らせんとの豫て心に存じ。そは難波にて留別の時にこそ
糸らせ給へ。這は犹収あるべし。と說ども更に取敢ぬ。為べきやうなく。終に
難波へ泊る衆客に東西饗ひて。謝せんと思ひて止まり。既にして其翌日の

亭午少し過る比。船は難波に泊るべ。乗合の衆客と共に。船宿に入んと
するに。那老僧在下を旁に招き。俺いこれより船を乗替。土佐國へ下るに就て
和主を相するに。忠信ゆゑ節操あり。然れども今まで親族の與に辛労
しく志を得ざりしなるべ。自今以後は好き主を得て。名を挙家を起さるべ。
と。犹いま要時の風雲あらん。且亦火急に災厄あり。終身の哭喪あり。是
前因の縁る所なれば。甚麽とも為術なし。さはあれども所親の人に必一度
遇ことあらん。開後は意外に心労も少るべ。侶ひとる女人なるも。和主と逍ぬ
宿縁あり。這等の事は後に必。思ひ當る事あるべ。先快迅き所縁の方へ。
其婦人を伴ひて。明日は詰て赴くべ。好せよ。と道棄て飄然として港口の方へ去
まくするを在下は急忙く推扯め。聖僧の示教謹で承りぬ。言食身上に的中し
なるべ。向来も必然らん。と辱くも打つけて。只一飯の齋食をぞ。進らせ給へ。

屈々姑且杖を駐めて尚御教喩を希ふ而已且は你は何方に住職し給ふ大德也。法諱は甚麼と稟もやらん願くは示し給へうと謹で演べば那僧は立駐り否とよ。輩内を喫ふる。俗男俗女に交まて。佛餉を受んやうはなく。煩累さへも無益と。沙門は本来無東西何處に投て屋處すべき和主ぞ主君と憑むべき人なへ。舊縁なきゆゑもあらばこそ今更出て甚麼ゆらせん只忠精ぞに怠惰ぞへ。後に再遍會ことあらんと。袖を拂うて悠然と眷顧もせず去るべう。

花はこゝかちらし去年の反かげに名なかしどろうる人もこそあれ

と一首の歌を吟じつゝ。渚の方へ下り去く。晒々落々たる風骨に再び駐んは有繋ゆゑ。小雲時は开方を着送まて。イミシクもてなしぞ。さても有為べ。那船宿にて酒饌を設け。乗相の男女を厚く款待。金百匹充を支與へて。助命の労を謝せしぶ大家大に歓喜く。舞々諷ひ。醉を盡して。當夜は其處に宿まうう。偖而人定まり

て後在下熟惟ふに。那旅僧の凡庸るに非。甚麼るう人にて有るう。既住を指とる一言に未然もさぞと査せらるゝに。火急に火厄出来まて。終身の哭喪と成れしに。そも何事にてあるやらん。所親の人に遇んとらひしも。誰ぞ淳るう知ぐるべ。明日は詰且這里を出べし。但所縁の方へ去けと示さるる故里へ回るのうるべき欲。さうとて帰て去うとも。那仇るし親政。目今第一の權臣にて。その奸黨充滿べ。訴るとも淳成べうべ。然有とて私に撃果さんも。那あの所後多まべ。単身にて本意を遂げに偖て日數を延るべ。忽に捜索され。狗死するに至るべ。除非それにて厭はど。恩義ある養父蜂六を連累せんは不孝なり。左やせん右や做すと想ふに属て想ひ出る。河内の所生の父母を訪ひ這首より最遡る。忠義の與に思ひ棄て。眷顧もせぬ親なりとも。邁べ去ともいそるまじ。先快那里へ訪去て。便宜に因て。進退を定めん。伊勢べ豫て立退て。養父継母の素

意ち如く。二郎を世嗣ふ立んるの。原是希ふ所へ。さて又國司のおん與ゆも。一臂の功を奏ぜべく。思ひられども。是も亦。出役の途中にて。既ふ命を殞さまて。一遍死しる一般うるべ。後ふ親政ら罪悪を顕露〜訴へて勸解きらべ。全く不忠とも做べらべ。と念ひ決やうるれば。垣衣を悄々地ふ招きて。這首ふ初て戒中の艱難を訪もー訪ぶも〜つ。幼少の時うり〜て。迭ふ認ぬ間るるど父守延の庭訓正〜く。五柳村ふ退きても。親く對面する事うるべ。未見の人ふ會るう如く。互ふ言寡きのうら。父の横難母の災阨。苦々ふ問慰めて。さて在下ら胷中を箇様々と詳く話ア。かくる情由を有うるべ。一且河内へ伯ひて。実の父母ふ對面ー。其うへ相模ふまれ伊勢ふまれ送着て所縁の方へ届くべ〜。といふふ垣衣異議ふ及ぜべ。妾へ婦女のものるべ。いふ思ふとも只独。遥ふき逆旅ふ去べきうらべ。好も互ふも然うべき様ふ。料理ひるうべ。如此るうへ。何處の人の手ゆも渡さて甚麽ふ

らん辛苦き目とも省ぶべきを。亡父の所縁ある。你ふ倶せられ。拭這上ふも心強〜うふても。俺母親へ怎ふ做せるひるんるるものを適来の憂苦景伯とどうとて何處を極處と索ぶん。俤めべ〜と知もせば。俺身も共ふ白浪の底ふ藻屑と成果て。這悲哀へるまーきを現江湖上の憂苦とへ憂苦へ妾ら人一箇ふ集寄うる心地〜て。命活くも伯らぞと。又潸然と泣沉うを在下酷く諫やつ。悔て回らぬ諄言へ千萬言も要るぞ。自ら念勵〜て。身を全〜て父母の讐を報いんとへ思ちれども。さうとも志顔折ぜば。縱計怎る強敵うるとも。討果さでやへ措くべき。不肖ぶれども。在下も。大恩稟る師の仇へ共伯ふ幇助とうて必擊ヒ稟ヒとべ。とへふ聊慰さる。面色を着て心を安〜〜然ども若き男女二箇ら共ふ走らば。李下の冠。瓜田の靴の誹謗へ免ぜ。原来先師の恩義ふ脊ろうられと。て又在下うるで。誰ら你を倶〜てへ去ん。進退谷る心地へすぜど。那嫂の溺るふ

手を以てといふるのあるべし明日。一日は推ふ處〜て在下俱〜て参らぶべ〜。河内へ到らば。父母ふ。縡由を悄々ふ告て。為術ハ幾個も有んといひて當夜り紙ヤを阻て那衆相の人站中へ。在下ハ去て寢うたその詰日那衆人ふ早く別さく一個の老実ある僕を夾ひて。這里へ来る案内者と〜つ。難波を出て参ることて路ふて垣衣ふ悄々ふいやう。今世を忍ぶ你ゑまび舊名を呼んハ心ゑ死ふ似ろう左も右も苟且ふ名を更らまてハいふ〜ふどゃ。といふふ垣衣領きて妾もそこを思ひ之ま什麼とうとも。念慮の隨ふ名着て喫べ〜。といそゑ〜まふ在下漫ふ考へ〜。信夫ハ陸奥の郡名ゑると思慕とのふふ憑の好まび。詠歌者流の翫べて名高く做ねとぞいふゑる。又那信夫のぢずりと詠〜ハ垣衣とのふ草の素を亂〜て衣ふ摺着うえと伊勢物語の一説ふのゑ〜ゑるも听〜ゑまび。垣衣を开伐訓換て。加支々如とせび什麼あらんとゑび垣衣會得て。就て信夫を更やて。這背

ハ参ることハ。這ゑり以降の滓どもハ。已ふ知せるのふぢ如し。思係ぬふ父母ふ對面ハ〜れども。滓齟齬ひて。両親共ふ。不日刃ふ伏ゑるハ。諾旅僧の言ふ錯ハび。終身の哭喪ゑりゑまて。又不意実父の遺跡を。續て姫ゑ之ふ傳き稟ぢ。亡父母の遺訓ふ恢ひく。在下ゑ身ハ安きふ似ゑう。徒まび件の老僧ハ回ぢく。凡夫ゑらば。佛菩薩の化現ゑとまで思ゑれてひ之。又那洋中の海賊と所見ゑる。高尾舸の壮夫ハ甚麼ゑる者でひひゑん。麁言も又如何ゑうゑんいと听まゑ〜く覚束ゑ。俏垣衣ゑん身遐ふ召仕ゑるべきゑん婀娜ゑふ。不自由の候ゑまび。幸ふて参らせゑるふ心限ゑく御意ふ恢ひく。一日も無てハ宜ゑぬゑふ。今でハ做でひへば。垣衣ゑゑ心下の憂苦ハさゑゑと查〜ひど在下とも無てハ得在ぬ目今の身とゑるゑゑれば稟出んハ有繋ふて。一日二日と猶豫ひゑ。今日まで稟上ざ〜〜ん。偖置とハ知〜食まゑば。姫ゑゑも亡父母も。人の文見を拠〜て。走ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ。

警安老僧看海路

ちび伝
安つぐ
ひんぎゃ

倘や思食まうと影護く想ひ〜ふ果〜とさる御推量ありしに面目ひろ紀綱まこと
以又稲城大人よ說まし〜綱ゆ。垣衣ハ听まう知れぬ。當下ふすら固辭〜ろ
綱を今更復さんや。此是稟上べきさろひど。那人の鴻恩れ一方さろ縁故を顯き
ん與だろ〜恁まべや〜く間暇あらば垣衣文ハ藤沢へ送り去て。野上氏ふ遞
與さぶ〜ハ在下ゞ信義も立難くまど。奸党们の間るく時ゆく。隙を窺ふ目今
ハ片時もあん側を立離るべきふ非まバ垣衣文ふも恁〜と。稟听せひ〜ふ。去方
定め躬一箇ふ姫ろハの御慈愛を蒙やと。未甚麼だろの御奉公もせひバ今
藤沢へ去ぞともは。假令那里へ到まうとも。猛可ふ所要めつ身さろひバ。尚何時
までも姫ろハふ奉仕て大恩の一端をも報いきろんと稟せふ心安堵つ。さて過ひひ
ぬと首ろ尾まど。漏さぶ脫さぶ。述くまべ。姑摩姫倍感歎〜。現様々の人身を。
听が念へば聚散離合。喜怒哀樂の迭代る。江湖上の光景ここそ不定さと。

いふ情由ハ知れぬが。你二人を夫婦ぞと。念ひ〜綱ハろうまど。さても前
世の宿縁めつと。那老僧の道まし〜ろ。後未必ずさる所由あるべ〜。奴家も
想ふ旨あまど。开ハ今議まべき綱りハ非ど。原未危殆き船中の賊難を辛うじて
脫まろハ希有るまど。忠魂義胆。貞操孝烈。兼も備へ〜你们ろまバ。神明佛
陀も見放ちるぬど。向来愛〜栄ゆべし。然まども垣衣ハ毎ふ另まを便ろうん。
心中さそと查〜ハれど是も亦天〜命〜蓋命運盡さぶハ再會忘ろ其期ろ
らん。嘆で時の至るを等閑然ハあまども藤澤へ去べき人を情ゆく。奴家ゞ故ふ
恥やるハいと無情ろ綱ハれ復一ろうでもろべき人ふ。俱〜と送ろハ易ろまど。今
要時這里ふ在て時を等ろべ悅喜の必あらんと思ふ所由あり。さらば故人ふ邂逅て。
幇助を得るゆ多ろべ。急まバ急忙ろハ要るきゆろべし。就て件の猿僧ハ甚麼ふ
る人の果ろうん最々心愛き人ろ。歌の意を以て案ろ。南朝ふ忠志深ろ人

の容を変ずるに猜ずるまで。然とてさぐり賢き人は。公家にも武家にも多くは所
えば。公家には萬里路中納言藤房卿。武家には児島備後三郎高徳などぞ。文
學和漢の有識と聞しが。終に所慥なる。倘くゝム們の人なるこそ欠。然るども
高徳は武士にて有るまゝ後に出家いしまゝども。いと甲斐なく頽折て。雲水に
迹を断べきなど。さるべき吉野の先帝を。諫難て身退まて。藤房卿にも劣
べきに。さはあらざるに那卿の。出家道世せるまゝに。建武元年の淬とゝいへば今
より八十年余前の事なれば百歳にも餘るべきまゝ。世に在さんは覚束なけれど。
道徳兼備すまゝ長生せらるまゝ。紀にも非ず。是も亦後に至りて思識なる
有るべし。又高尾舸の壮夫は東西を掠むる海賊欤或は英虞将曹の難義を
救んと来る人欤考るべき所由は無まゝど。威風を示して漕寄るは那親政が
阿黨とは決て仇讐の人なるべきまゝ。那這戦爭ひとるゝぞ有んに依て案に庶

士は何程やとても一命を断るまでこそ至らぬべし。是亦這世に活命て天縁盡
ぬは會期有べし。酷く莫物を想ひとゝ道に安次坦衣も。倶に然こと感歎して。斉
明断を稱しるる。長話説に夜も更て。前栽に惜く霜色も。皎と倍てと所看と
るに。葛城山の夜半風に吹る。燈火畫んとして。一番雞の聲をするに丑三も稍
過しるるに。安次佐と頻と更め。噫俺ぞ忘慢するき。這癖者と糺しも問て机
密多る話説を犯るは最過失るるき。乞や這奴ぞ今宵の顛末。白状せんと
庭へ飛下て。淵の索拿詰て。やをまこ盗人ぞん眼前にて。一事も漏さず稟上べし偽
らば今立刻に斬て棄んぞ。奈何ぞや。と烈しく詰問たるるり。

第四十八回

義に感じて騙賊非を知る
計を授けて勇婦偷児を免れ

件の賊は神草比奇特に憑て。被たる。手疾の痛苦も忘れるる。頭を低て

衆人の忠魂義胆の長話説を首より尾まで熟聴て醉るゝ像く默々として居
たりしが今宵安次郎嘖問まこと頭を抬げて吐息を衝き連に歎息して道やう此類
少なる你們の艱苦は怯まぬ豪俠義烈揃ひも揃ひ英傑の人話説を料らずも
承まして三十八年造ら罪辜の天怨一きを徐く慮識ひべ始めて夢の醒る
像く最愧羞〳〵堪難くまべ快々首を刎らべし。さまでも今宵這里に參り
滓の由を知食どれほど大事なるかも知るべ且は可き身上の懺悔話を直と
て。あん災難の繫るべき仔細を稟て誅せらるゝ是併你們の忠孝撓ぬ御心に感
じて只半晌も善心に立復ぶるに報恩まべ滓長くとも聴召せ抑小的も祖
父の騙局盗賊にもいたび陸奥國信夫郡平田の里に葉四郎と呼ばる莊
客の子に荷三郎と喚做る者でいま父は農業の間隙に牧師をもして
悪馬を自在に飼ふを以て新田少將義隆朝臣陸奥の國司に任ぜらるゝて下向し

給ひし最初より此の馬の鑣取に召出されて身近く役はせ給ひ
四郎は只管主君に後ひ奉るを這處那處の戰爭も此の跟隨せ給ふ
家に在さ〳〵同果給べ小的は郷里に在て母親一名に育られ打懲さて人も無
まべ成長するに隨ひて懶惰放埒母親を説破め悪き遊技は一箇として記憶ぬ
ふもなく年紀十二三の比より酒をも嗜み女を挑み從ひざるは強姦賭博に
さへ耽ぬ只悪党に交會ひて晝とまく夜とまく家に回らず近里比隣の憎
まれ的也他人の訴訟止晌なるまべ母親はこれを苦に病み小的が十四の春竟
に黄泉の客と做まべ當下は小的も有繋に悲しゝべ形容ぬ葬礼
を營み五日十日は頭痛をして外へも出ず在るども咽喉過て熱を忘る譬
喩に漏ず悪棍駿許に再誘れ激勵まして就て四邊を徘徊し誰に憚る者
も無まべ悪行日々に増長せべ村長も持餘べ父親に這由報まべ奉仕の暇

に回来て屡折檻しなれども。馬の耳吹く東風と聴流して寄隷ねば葉四郎も為
方なく。小的が十五の手に村里の戸籍を削て棄て永く勘當せられてけり。然りし
後ハ回るべき家もあらざれバ。いよ／＼倍悪事に慣ふ身の因果。然有とて膂力ハ人並に
些ハ超る所もあるに天稟自得の騙局と竊偸。簷を飛び壁を走て。他を騙き東西
を掠奪る本事ハ往昔の稗史にものせまほしく讓るべくもあらざれバ自ら放を不良の賊
心。這首に初発て那邊這邊となく。駈巡てハ他人の東西を。竊する時へ。夜發倡妓
に交まて戯楽を縡とし。兇を陳ねて飽くるを知ず。倘又賭銭に幸あるときハ。孺絆
一重に肌膚を覆ひ。菰を被きて臥も夜もあれど。些も怯まぬ贋胆勇。竟にハ故郷を
追却せられて。或ハ出羽越後越中。或ハ常陸下野上野。五七箇國に横行して。得うる
騙賊を生活とし。然れども悪党の中にてハ。小辨口も利て慾ある。侠氣も有しかバ。
夥計の奴們に崇られて。はやく雌伏もせざりしに。今より十三年前の春。造化の

最多しそイむべき方もあらざれバ。竊に故郷へ立回り。這首那首に躬を潜めて。父親
が便を又聞バ去々歳の秋。義隆負方。二名の相公ハ勢力没て。陸奥を落させ給ふ折
主君に従ひ奉らせて出て往方も知ずなりしが。几程もなく義隆朝臣ハ底倉にて撃
れ給ひぬと聞えしかバ葉四郎も殺されけるならんなど。のみ者ハ思ひけれど身の術
なきに克も訪ずてさて止けり。恁て夏初より秋末まで。陸奥に竊躱れて在しかど面
識る者の畏しけれバ。倒に江湖窄くてさせる手段も出来ねバ。立去んとせし時。の関
の這方の樗鎖邑の土産神祭の試楽とて人眼多しく立集ふ。往會せしかバ
何にもあれ攫ひて些の路費を得ばやと思ふ。十七才許の女児が愛々しきが。里ある處
に立て有しが。切てハ是を拐して越後の新潟へ賣做バ。路費だけハ有べしと猛可
に動く慾心もて。嗅して倡ひ去りしが。さてハ侏で有つるよ。又登時に小可を捕んとせらる
れしハ伊勢の國司の殿人にて。稲城殿とか人よぶが。侏ハ斉人よ狼ならば竟にハ災危の

基となりて、聞が如き艱難を受たまひつる勦しさよ。你の父君舘大人ハ、小将ざねの御
近衆の首長でおはせしかバ、小的が父親葉四郎も、ちん部下に属られて、平素に恭
りし恩顧を蒙りぬれど、聞知まゐらせざる人なる女児御とも知で拐し奉らせつる。遺
憾ハ今更悔て回らず。思ひまゐらせ斬罪なして冤念を晴させたまへかし。さて小的が不毛
山にて稲城ぬりに捕稠られ搦めらんとせし折、不慮葛藤に脚を捉まれて、千仞の
谷へ轉墮しに、幸にして甦生る。其後の事ハ、恁々箇様々々なりきとて、東海
道にて長総と小夜二郎を騙局に繋て、盤費を奪ひしゆゑよりて、罷村の鈍梅
勝松們が事、また曽根川の獄舎を踰て長総を助けしかバ、それより這河内へ来りて、
五十日槌電次が若党に倣しかバ、又那夜稠の混雑に乗じて、楠家の重宝を偸しし
るより、隆光を詐へて却て長総に詐へられ、首を刎らるべかりしを、就盛に放免せられて、遊
佐の城に在しるまで、一五一十を詳く説て、那長総ハ小将ざねを底倉にて撃たりし。

藤白隼人安同が妻なる由をも知ずして、假にも妻よ夫よと喚れし、婢の差なさ
よきるべすとも。那奴ハ既に変心して、小的を訴へつる冤恨のみに、豪衰となりて死償に
通じつる情景なれバ、近日に慮知せんと計ひつるものから、那侭にして死ぬるハ
有撃に遺恨なれども、弁将未練の譫言なれバ、今ハ稟すもその甲斐なし。
只等閑に做過しハ、木造泰勝が婢にて、未知し食ましをや。那泰勝ハ伊勢を追亡
し。今ハ赤阪の館なる。持永主に昵近して、現在那里にありといふを駭く。垣衣安次
それハ亦甚麼すと詢り問へバ、荷二郎ハ泰勝が父親政より後雅を憑まれて、密に
花洛へ上せしかバ、そを下りの満家が料理にて、偽使の與に泰勝を乞て、這荘院へ
差しかバ、持永姑摩姫に繋想して、齊天行者が幻術を頼みて、略奪んと志
こりし緯。山猿の荒出て、その計の徒しうなりし事どもを、詳明に悄き告まゐらせて、往る元
日に、泰勝遊佐へ使に去て、就盛主に小的を乞ひ携回りて持永主なる。前科を勧解て

所従ら。常ふ那身ふ隨へて。仇を防ぐ事を課せ。且長総ぐ虚実を探ぐを。小的が
鬱身をも散さぬと。道ふ依て。小的大ふ便宜を得て。禀せまふ〳〵許諾し。
那達の小六ざゑハ。父親ぐ主君の令郎くと。絶て知れぬ這頭へ来ぐ。闇討ぐを
恭勝ぐ。憂を共んと約〳〵ら。恁るふ郷ふ恭勝ぐ。小的を携て回ぐ〳〵路を伊勢
ふて使役ひ〳〵草履奴敵介と唤做ら的。今ハ不九郎と名を換て非人と做く
みらるふ撞見し。開夜小的を差〳〵て。件の敵介ふ金を與へ身を裝はせて入稠
せ同〳〵駐めて隷ひら。さて或日恭勝ハ。敵介と小的ふ酒を吃せ。悄々地ふ譚ふ
やら。今一番舘の令郎ハ。箇様〳〵ふ謀ぐらるのひて。姑摩姫を得んとせられしふ。
又姑摩姫ふ裏を透さて。齟齬ひらるのみならず。正直の女白子を以て換玉ふ
為ら〳〵ば。郎君大ふ憤らまつを。遊佐主様〳〵ふ是を勸解て。再謀らら〳〵貴の
らふ依。件の事の差錯ハ秘て人ふハ漏さまてひど。和郎ふハ悄々ふ听ぐらく。必ず他ふ

漏〳〵そ。俺も旧臘正直の庭の山ら千里鏡ぐて。八九の荘院を覗看〳〵時。另ふ一箇の美
人を看らるふ。伊勢ふを奪せら。稲城の信夫ハ最能肖ら。さる故ふ郎君の御
婚礼整ひらんべ稟請んと約し措ふ。ふと遺憾〳〵とのふを听て。敵介の不九郎ハ
駭きて。原来信夫を看るひら。小可も郷日ふ。如意宝珠院の門外ぬて。信夫ら
上墳の代恭ふ去らるを。遥ふ看らるとのふ。恭勝訝ぐく。什麼とのく。開信夫
ら。正可ふ那處ふ在んとハ思も繫ぬらぐ。他ハ俺を父の仇とく。狙撃んと
ひく申ふまべ。前番父ハ告て。他ら東ふ去んとする。船中ふ人を伏て。蒙汗薬を
呑せら。結果のくとのひ〳〵を。父親ハ許諾〳〵ひ〳〵。開後俺ハ花洛を出て。這
處へ下さてあらんと。父親とハ表向絶交るまべ。便りくてなん回答ハ未慥ふ
听ぬども。那謀行るまべ。這世ふ信夫ら在んぬらるゆ〳〵見錯へらるゆハ非ず。
とのふふ不九郎頭を掉て。伊勢ふを他を奪ひ〳〵折も。三十日の別荘ふ在〳〵

頃も面を包ミて省せざりしゝべ。他れ小可と知ねども。小可ハ他を省錯へべく
も也。那上墳の回路ハ。小可鈔を乞しゝべ。伴當の男ハ拿出て。所未んと
しゝるハ。財布の辺の。腋刀ハ柄ハ纏まれるを。解とて躊躇する間ハ。他ハ
開頭ハイ〻ゝゝゝべ。左の耳ハ黒子まで。脱ゐ〻認得てひゝと道べ。泰勝大ハ
駭き。然ゝゝゝ又這國へハ。怎ゐ〻て来ゝゝん。最精〻きゝゐゐゐべ。尚克真
偽を省決ん。ゝゝその日ハ他譚ハ稜ゝゝゝ。昨日泰勝着急〻〻。小的と喚
て悄語ゝゝ。明後日ハ郎君河備の館へ。聟入ゐとて出立ゐハ。其後来のゐん伴當
ハ。豫て俺們ハ分付られゝ。怎ゝゝども那信夫ハ。這頭ハ居ハ由断いゐハ。依て屢推
辞〻〻ども。郎君一切允ゝゝ。當惑這首ハ逼ゝゝ。就てハ和郎ハ憑むゐゐ。
开ハ另の滓ハもゐ。和郎ハ詹を飛壁を走る。竊偷の術ハ得ゝゝゝ。脅
力も人ハ起〻〻べいゐゐ〻て八九の荘院ハ竊び入て。那信夫とゐ〻〻き女を

掻攫ひて得させよゝ。ゝゝハ俺その面を省て寔ハ信夫ハ非ゝゝゝ。口説落し
て妾ゝゝゝべく。倘又信夫ハ決らハ。殺〻て患の根を断べし。萬一箇も悪ひ難べ。
那女の出所来歴具ハ所知て回らべし。那姑摩姫ハ武勇剽姚丈夫ハ捷ゝ〻
その上ハ。隅屋某甲と喚做る。若党ありて是亦。萬夫不當の本事ありと
所て虚々馬ハ乗て。明後日の件當ゐハ立ぐゝゝ。和郎も其頭ハ小心〻て只顧
這義を憑むゝ。とゐるハ的推辞難て。成ゝ否ゝ知ども。然迄ハのゝゝゐゐ
べ一掉〻て験むべ〻。任他那姑摩姫ハ。神ハ通ぜ〻術ゐゐハ愁ハ竊入て首と失
ゐゐもゐゐゐん。況や東西を奪ハも非ず。活ゐる人を畧するハ甚難き業ゐゐハ
褒美ハ奈何と期を推て。泰勝ハ會得せ。就て昨夜も這処ハ泰ゝゝ。那這と覘ひ
ゝゝども。内外の小心御堅固ゝゝハ。隙と得ぜ〻て徒く回り。尚又入ら宵も入間を
幸ゝて紛ゝ入。宵より躲ゝて窺ひハ。垣衣どの厠ハ去とて。独外面へ出ゐと

看て。天の貶と走蒐ム。矢庭ニ拿へて走ん。と。案外ヤ剽姚ニ立地眼ヒ傷ら。
借阿面々と捕ヒ。ヒ。ね這他ニ稟ヒ。べきヤ。といひ。ぶ。快々首ヒ刎らまて。
那泰勝們ぶ謀畧ニ乗ぬ御ニ心ひべ。と道ニ大家所竟て。意外の念慮ヒ做
そ。る中ニ。垣衣ハ愁然。る面ヒ拾て歎息し。姑摩姫の前ニ額突て。那木六泰
勝ハ。妾ぶ雑父ヒ害し。る。讐敵でハ。軟弱き婦女の身ヤ。ども。ぶ。一太刀寃ん
と。豫こより思ひ。ぶれど。在家ヒ知ぶ。ば黙上ら。し。ヒ。返ら。もあ。ね赤阪ニ在と呼てい
打ヒ。措ヒ。ば。然ヒ。ども。ヒ。る。權威あ。宅内ニ包護ヒて居ん。ハ。輙く撃ヒ。べ。ヒ。もあ
ら。ぶ。ど。幸ヤ。て這賊人ぶ。妾ヒ拿て泰勝ニ贈ん。と。て捕へら。ヒ。今善忍ニ復て。と。
自ら稟ヒ。ニ偽ら。べ。姑且這奴ヒ免ヒ。る。人妾ハ他ニ拿へら。ヒ。去て泰勝ニ詐り
寄。寃と復し。ぶ。ち。ま。し。。假令仇ヒ。ば撃ら。ん。とも。生て再遍回ら。ん。ヒ。ハ。と覚束
あ。く。こ。そ。ん。海ヒ。る深し。ぶ。る高き御慈恩ヒ被ら。ヒ。る身ヒ。せ。る。ん。役ニ立

もせで。這侭ニ別ヒ。ヒ。ら。ん。ハ最も可畏き業ニ。ぶ。ヒ。ど。誠ニ餘義ヒ。る。ヒ。ぬ。ば。
願し。く。ハ目今ヒ。る。ん。暇ヒ賜ら。べ。し。ん。と日屬ハ萬箇条順ヒて風ニ
靡ら。る青柳の。ハ。ども沉静き小女子ぶ。父親の寃家ヒ。ぶ。今眼前ニ在と听てい
ら。ぶ。ぶ。憤怨ニ堪ど。魂消ヒ。ど。絶て撃ん。と言累ひ。羞ら。ぶ。色ニ赤心所看て。
有繋ニ服屋の宰臣。ぶ。る。館大六英直ぶ。女児と所知て健氣ハ。姑摩姫
ハ那這ヒ。看て。听て感歎し。て。通微妙き你の孝義ヒ。ぶ。箭把る家ニ生ん
者ハ。婦人ぶ。ヒ。て死ヒ。怕ら。ん。や。誰も恁ら。て有べ。き。ヒ。ハ。ぶ。る。ぶ。る。撃難き。寃
家ヒ。急ニ撃ん。と。し。て。仇の刺客ヒ。案内ニ立。滓遂ぶ。ヒ。る。ヒ。知て。も。開身ヒ。贄
ニ龍の住む。淵ニ入。ま。く。する志の。孝烈ハ。ヒ。る。ぶ。る。謀畧の短き。ニ。ハ。ぶ。る。心ヒ
静め時ヒ。等て。尋常ニ勝員ヒ。決し。。當下撃ら。も。撃ら。く。も。只運命ニ任ど
し。。只今滓ヒ。急可ニ。て。竊ニ仇ヒ。撃ら。ん。も。却て奸人の手ニ死ぶ。世ニ孤孝

を知る人もあり。狗死せん欲すとも忠孝の名聞ふるゆゑあるべし。武士は家名を惜みて祖先の恥を顕さぬ。惣未皇朝の風俗なるべ。死をのゝ忙ぐは要なるべし。這誼は奴家が仕せて措き遐らぬ。本意を達する。籌策は凡個も有ん。登時は復一も。恩義の奥ふ助太刀して。那這共ふ両全の美名を天下ふ揚ぐべし。遊莫眼前の。仇敵ふ威勢あるべとて。看つ遁して月日を過さ。俺身を摘て胸中の憂苦さそと査べるまで。奴家も曩ふ仙媛の遺教ふ背きなりて。単身ふして義持を撃まくしるる錯誤ろ。淮盈夫婦を徒ふ刃ふ伏べるる折。千悔開首ふ及びざる。殆脚を噬るき。さるべ前車の覆ゆる。蹤は遐くも有ぬ物を。你も後車の誡を。雲妻時忍びてあらずやと。説喩さるて垣衣は。始て夢の醒るぶ像く。數回額突つ。諾神そしき姫うへの。あん明弁は蠢愚ぶる。妾が耳ゆも最克入て。御教誨の旨一々ふ。肝ふ銘じてさひ〳〵ふ。仰ふ従ひ時を

等て。尋常ふ名告係け。勝負を天ふ任せ仕らん。寃家の在所を所ふる仰ふ。不覚ふ遍を仕り〳〵。甚ぶき誤よひと言稟つて歓喜べ。姑摩姫はうち頷き。荷三郎を眷顧て。荷三郎とやらん陛ふ所け。和郎ぶ倣ふる年来の。悪事の。次第は神明佛陀も。免しあらぬ所あるべ。只今首を刎べきなれども。幸ふ〳〵。垣衣を傷ぶ。又衆侠の信義を所て。心を更めるとりるべ。今夜ろは一個の善人とこそ云べきなれ。然るべ今番の科を免して。命を助け差さべし。日人う言ひ一念を。翻さべて後々は人を幇助て功を樹今まで作り悪行を補ふのあるべ。天地の神明和郎ぶ身を必罰べ。意得るろと告知せて。復一开奴ぶ索を解て快後門より逐出れ。といふ〳〵安次眉を顰め。仰ふ〳〵。ども。這奴は几遍ろ人を騙て或は殺しあどして。大罪机変ふ長るべ。今一命を助ら人として。前非を悔ろる面色はなきど。放べ復や悪念を。蜚起さべきも料やぐし

荷二郎悔非帰
赤坂
こまひち
かんきち

安つぐ
きねこ

且ハ衆人の机密をきゝ。聞識てひへべ。持永恭勝們と商議て。甚麼様の災を。
慝出さんも知べからざゝ只快他ぶ望ふ任せて。誅戮ひいぢやとのべ姑摩姫微笑
て。你の遠慮ハさるゆゑ。他衆人の忠孝ふ感て自ら開非と知て。今宵
よりして善心ふ立回りくとりふめまべ。除非開言詐偽をうとも。これを殺
ハ善人を傷ふ。又人を殺と者ハ必殺して免さるゝ。古今変らぬ法曹なれど。
嚮ふ他ふ殺さまとうん。慳貪不負開身と逼て。天誅殆及べき者共さるべ。
詐へぢて殺しうるも。姑く免さるゆゑ。人の偖亦衆人の行状と。白地ふ聞知
うゝ。絳の不便ふ似れども。約莫英雄豪傑ハ。隠さるゝと行れべ。基手青史
ふ載らまて。千載の下ふ傳ふとも。美譚と做るべき節操と立べ。天地ふ紀て
羞ることなきれば即今聞くうし。野上著演。達助則英直夫妻。維盈夫婦。你
二名ハいつも更ゝ。守延の忠。昌郎ぶ俠。相取庭吉ふ至るまで。怎さうまゝ士の所

為あらぬとせん。されべ開絳室町家へ聞えうとも異うハあらぬ。抑民の父母と
ハさる善を揚。悪を懲し。縦計然敵うとそも。開忠信を賞しとそ。國家ハ沿
ハ巢べきを。義持心窄くて。南朝旧臣の裔と。根を絶葉とも枯さんとする
ハ寔ふ薄情きゆゑども。さまべ新田楠木の餘流と知べ。害心あるとも。ハ難
うれど。是亦天命。時運なり。君御聖運幸うべ。開方ぞゆの人その。性命を全
るゝ。倘又御聖運傾べ。誰と倡ふ活命て。仇讐と共ふ白日を見んこハ助
則も同志なるゝ。又持永恭勝們ハ。斗屑の小人們なべ。怎様ふ謀ることも。丈
尺の知てる絳どもあり。機ふ臨ミ変ふ應じて。這首ふも小心とあるべ。但垣衣
ハ荷二郎ふ。旧怨もあるなれべ。殺まくも思ふべれど。今又寃家の在所を報う。
寸功あるとも。ハべうとなべ。放ち遣んば甚麼ぞや。と所て垣衣怎で背ん。
宜ふうふ荷二郎ハ妾を拐くる者なれども。殺くるふも非ず。今の

忠告ふ想換て。怨を遺さべくも仕らぎ。といふよ姑摩姫領きて。さらば復一快回〳〵祢。天明ふ程もあらめるふ。奴隷共よ知ぬ又妙あらぬ處もあ。快々せよと看急すべ。安次殆感心し。現姫うの御明論。今ふ始ぬ事ぞ。寛仁大度のお料理ハ感伏の外ひなぶ。をハ助るぞ荷二郎とて。索を纜きて。俺腰ふ差こう他ぶ腋刀をぬきとて遽ち出せば。荷二郎ハ只平伏て頭を地ふ着。四十年来一滴の泣水を知ぬ暴夫。絆の始末ふ感激し。聲を放ちて哭居こうぶ。念ハ難てや腋刺の刀やすりと引拔て。自ら吭を刺んとすを。安次遽ぶ喝落し。狼唄こうる荷二郎よ。恁辱き姫うの理義を喻て許さをうふ。今更自害せんとすハ未悟らぬや。醒ぬと。罵り懲せば。荷二郎ハ。徐ふ泣水を拂ひ。愚鈍の耳ふも理逼こう。御教訓の趣ハ。〳〵ぶ。狼唄こうふハ。ねども。熟思うとも看ふ〳〵。比年日屬几番う。他の難義を看も顧らで。財を奪ひ人を售て。父母妻子ふ歎悲を係こう。哀を這首ふ慮知て。悟り

て見まべ是ぞふも。活永經て在ぬや。をを況や。俺父親の恩を稟こう館大人の令愛を拐し。盡れ枉難を繫糸うせ。知ぬ〳〵とハいひぶ。主君少將ぞの公子こう小六殿を仇とて。狙撃んとこうるぞハ。死をとも罪を贖ひぐ〳〵。恁るを今宵這御館へ窃入つ垣衣どのを。捉へんとせ罪をも問ぶぞ。首を接まこうれぞと。道まを赤坂へ回らうべきう。あん身の猜ひるふ處悉く开理あると。尚姫うハ御心長く。松密を听こうる小的をも。放ちて顧ぶ。御心廣きあん料理ハ。大丈夫ぞふ敵得難き。御胆畧を想こうふ着ても。只差愧べきハ俺身のみ。且就盛茶勝們ふ。譚相まてハ過差こうるぞど。就盛ふハ助命の恩あり。茶勝も亦小的と。知こう好意こうるふ。をを。這儘ふて北も走らば。亦是人といふべこうば。怎ぶふ〳〵ても今宵ふ限ア〳〵し。小的が運命ハ。只快允して死ぬ。やよ喃々とうち勸解て。喞言を。搔口說く。聲も曇ぶて小亂こう。泣水の雨ふ悪念を。洗ひ流ふく色所見を。

誠實ハ自然と現ぜそう。姑摩姫所で感嘆し。適微妙き和主ぞ覚悟。今宵よろづ善忍ふ立も回ら〜羞悪の端。感ぜるふ餘あり。現悪ふ強き者。善も亦強〜と云。俗の諺も和郎ぞ身ふ。今宵首めて着るものを得う。然らば和郎ふ託ぜべき一件の机密あり。這方へ倚れと。喚迩着て。目今死る命を存在へ罪を贖ふるのあるを。克為べきうと問撃ぜべ。荷二郎思らぐうち咲て。死をのを急ぐあれはもど。唯道理の差急役で。自殺せんとしひと。倘存命てあん與ふ做ら辭あるべ頭を砕うぜ。骨を刻まぜひとも。辞ぜべくいひべと。不覚ふ勇む聲高やふ意氣憤然ふてるを。姑摩姫ハ噫莫喧と推禁めて聲を悄め。和郎ぞ心底ぞ有らん。那歌店の目四郎ぞ野上史の高義ふ感じ。害心を更めて。藤白隼人を撃るふ擬ふとるふ非孤ども。那叅勝ハ持永ぞ庇陰ふ倚る大敵あるべ。垣衣一個ぞ力ふて。即今撃るべくもあらぬを。和郎幸ふ立回ぜて。幇助て仇を撃しめあべ。主君ふも亦官長ふも。

恩を報ぜる一端ぞべ。开計策ハ徒々〜箇様々々と事詳悉ふ聞き示せべ荷二郎ハ耳を傾け感心して仰承りひぬ。現も美できあん料理。そべ暇を賜ふて。赤阪の宿所へ回るべ。但這仍回ぜて。他ふ的と精ん狄希くい怎東西ふまれ編入る証と做るべき。東西一箇借ぞ。と云ふ姑摩姫頷きて。开頭の用意決めて住しと垣衣を顧て。你の衣服を一個出れ。と分付て荷二郎ふ遞与ぜて。這ふ袖を以て徒々道べ。叅勝必猜べ。又豪袁らつハ悪僧ハ聊の幻術あり。甚麼とも前知まる由あれべ。开奴ふ知ぜぬ様ふてあるとて。嚮ふ垣衣ぞ水ふ浸ぜ。神草を乾ぜて。机上ふ措るを拿て。こハ神仙の賜ひる。人間ふあき霊草ぞれど。姑且和郎ふ貸措べ。這草を身ふ属るるべ。豪袁怎ある術あるとも。和郎ぞ意衷を知るるの能べ。目今痛痍の頓ふ痊しも。全這草の功験あるべ。奴々鹿鹵ふ思べるべと。説喻して與れべ。荷二郎ハ雀躍して酷く歓喜び。護符

嚢を解開きて件の神草を受収め。そうべとだうう身を起し。三拜つて那小袖を。閃めと肩ふ打懸て。後門の方へ出去べのあ〳〵頻る雞の聲ふ紫ぐもうる横雲の色も東の空ふ所看て。奴隷ど咳く庖湢の後を。那誰時の薄闇き。霧ふ紛ぎて回ゆるうう。

作者云。此回の次ふ北畠俊雅河内へ未ゆて再遍姑摩姫の婚姻を俱を事。又荷二郎ど赤阪へ回ゆての所為。坦衣ど復讐の事。豪袁長總們ど顛末を。著ぶべく思ひ〳〵ども。然而ふ小六ど出現を語すふ聊妙あるぬ所あるべ。赤阪の一條ふ姑且後集へ讓ゆて。次回ゆうふ專小六ど事ふ及べう。淆官請事の沿定せぬを忍びて。後集の發兄を等べ〳〵。

開卷驚奇俠客傳第五集卷之四終

沿